

氏名(本籍)	たけ い たか みち 武井隆道(長野県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第2424号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	ゲーテに至るヨーロッパの身体表象の諸相 - 舞踊と文学に見るアレゴリーと象徴 -

主査	筑波大学教授	Dr. Phil.	畔上泰治
副査	筑波大学教授	博士(文学)	川那部保明
副査	筑波大学准教授	文学修士	濱田真
副査	筑波大学准教授	博士(文学)	山口恵里子

論文の内容の要旨

本論文は、十八世紀後半から十九世紀初頭のゲーテに至る、ヨーロッパ近代の文学と芸術（特に舞踊）における身体表象を、アレゴリーと象徴という概念を軸に通時的に分析し、ゲーテの作品に見られる身体の具体的存在性がどのように生じてきたかを探ったものである。

本論文は大きく三部で構成されるが、論者はその前にまず序論において、本論文全体を支える学術的な手法と基本概念を述べる。即ち、論者はまずミハイル・バフチンならびにジュリア・クリステヴァが著作の中で展開している間テクスト性、ポリフォニー性、カーニヴァル性の理論を考察し、本論文における分析手法の一つの柱とすることを述べる。続いて本論文の考察において重要な概念となる「アレゴリー」と「象徴」概念に関して、ゲーテ自身の言説とゲーテ研究者 Fr. グンドルフの知見を再検討し、問題の所在を明らかにする。

第一部

第一部では、十九世紀に至るまでのヨーロッパの宮廷祝祭に関する考察がなされる。

第I章では、ルネッサンス期の宮廷祝祭の位置づけを考察し、カール五世の存在が古代ローマの皇帝観念を現実に視覚化する機縁となっていたことを指摘する。また論者は都市という小宇宙空間の中で繰り広げられた祝祭では、参加者が同時に演戯者であるというカーニヴァルの状況が成立していたと指摘する。

第II章では、十六世紀末のフランス、ヴァロワ朝の宮廷祝祭について考察がなされる。論者は、そこには宮廷バレエの初期の姿が見られること、新プラトン主義哲学の影響の下にアレゴリーが多用されていることを指摘し、この時期の宮廷祝祭は演戯がすなわち政治であり、現実世界とアレゴリー的世界が表裏一体となっていたとの知見を示す。論者はこのようなアレゴリーを「実践的アレゴリー」(praktische Allegorie) と名づけている。

第III章では、ルイ十四世時代の宮廷祝祭とバレエ、肖像画を対象に、身体像が具体的に固定化されていく過程を分析する。論者は『夜のバレエ』や『魔法の島の楽しみ』を例に、演戯空間のアレゴリー体系の中で示されるイメージを通して、廷臣と国王はそれぞれの身分を具体的に確認していたと指摘する。また、こう

した具体性は国王の肖像画における身体像においても見受けられると指摘している。

第Ⅳ章は、レオポルト一世の祝祭を『黄金の林檎』と『ラテン君主国の勝手』を例に考察する。論者は、そこではローマ皇帝位の後継者としてのハプスブルク家という理念が打ち出されている一方で、臣民など国家の個別要素は抽象的に示されるにとどまっていたと指摘する。

以上のように、第一部では、論者は閉じたミクロコスモスとしての宮廷の祝祭において展開されている、観る者が同時に演じる者でもあるという関係性に着目し、そこにカーニヴァルの性格の存在を指摘する。論者は更に、アレゴリーを超越した具体的存在のイメージの成立がその一部に限られ、全体としては実質を持たない記号に依拠した表象にとどまっていること挙げて、宮廷祝祭は「カーニヴァルもどき」(Karnevaloid)であったとの知見を示している。

第二部

第二部では、十八世紀の舞踊改革運動が考察される。

第Ⅴ章では、論者はロマンティック・バレエとそれ以前のバレエを比較し、本来ステップの様式性に美の根柢を求めたバレエがロマン主義的に「内面」を表現しようとしたときに生じた矛盾を『ジゼル』のヒロインを例に説明する。

第Ⅵ章では、十八世紀半ばに起きたバレエ改革運動バレエ・ダクシオンがG. アンジョリーニとJ.-G. ノヴェール等の作品と芸術論を例に考察される。論者は、ギリシャ悲劇を理想として本格的なドラマとしてのバレエを確立しようとした両者は、古代のパントマイム技法を研究し、復活させたが、その題材がもっぱら神話や叙事詩にあること、また登場人物の内面表現もギリシャ悲劇的の領域にとどまり、近代的な個の感情の提示には至っていないことを挙げて、バレエのパントマイムが真の意味で内面の伝達方法として成功したのはようやく十九世紀になってからであったとの知見を述べる。

第Ⅶ章では、ノヴェールの著作『舞踊とバレエについての手紙』が、「情念」(passion)、「自然」,「模倣」という三つの概念を手がかりに考察される。論者は、ノヴェールにおけるこれらの概念理解はアリストテレスの『修辞学』の域を出ていないことを指摘し、アレゴリーを否定するノヴェールには個人の体験としての自然や近代的な意味での内面の表現が意識されていないとの知見を示している。

こうして論者は第二部を通して、十八世紀半ばに生じたバレエ・ダクシオンが身体による言語表現という方向を目指しつつも、そこには保守的傾向が見られ、概念的にはアリストテレス的な枠組にとどまっていたことを明らかにしている。

第三部

第三部では、ゲーテにおける身体表現の問題が考察される。

第Ⅷ章は、M. バフチン、M. フーコーの知見を手掛かりとして、教養小説と時間、視覚に関する諸問題をゲーテの作品『イタリア紀行』、『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』、『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』等を例に考察する。そして論者は、ゲーテはイタリアの風景の中に時間の蓄積を観取し、時間と空間が生成している文明の現場を体験していたと指摘する。

第Ⅸ章では、ゲーテが創作し、演出した『漁師の娘』を取り上げ、宮廷劇の伝統と近代的な身体観が考察される。論者は、この作品が君主への賛美やヘルダーによって採取された民謡を織り込み、宮廷劇の定式に則り作り上げられていながらも、上演の場においては観客が単に劇を観る存在ではなく、劇が生起する場を構成する不可欠の要素となっていること、即ち、この劇の上演は宮廷的な「カーニヴァルもどき」の出現の場であったこと、更にまた屋外での上演の中で、観客は自然に対する不安感を通して身体の実体感をも獲得していたことを指摘する。そして論者は、ゲーテのこの宮廷祝祭劇は宮廷劇の伝統と近代的な身体観との接点に立つものであるとの知見を示す。

第Ⅹ章では、N. エリアス、G. ルカーチが示した十八世紀におけるドイツ市民層と貴族層に関する知見を

もとに、ゲーテの『若いヴェルターの悩み』が考察される。論者はまず、ロッセの許婚アルベルトが市民層の意識の代弁者であり、主人公ヴェルターはそこからの逸脱者であると位置づける。そして『ヴェルター』における語りに着目して、この作品にはさまざまな立場の人間が登場し、それらが相互に多様な「編み合わせ」を作っていく過程が描かれていることを指摘し、この作品を主人公ヴェルターによる第一人称の語りとして論じてきた従来の作品解釈のあり方に疑問を呈する。

第 XI 章では、作品『ヴェルター』における身体の提示という問題が考察される。論者はまず、この小説の登場人物を詳細に分析し、個々の登場人物の身体には客観的な姿が付与されていながらも、そこには主人公との空間的な距離の存在がつけねに設定されていることを指摘する。そして、これまで美学的、思想的そして精神分析的な観点を中心に批評・解釈されてきたこの作品には、身体の提示方法や距離の問題など、身体論的観点からの考察が重要であるとの知見を示す。

こうして論者は第三部において、ゲーテは絶対主義的秩序の中で成立したアレゴリー的体系の基盤に立ちながらもそれを克服したと位置づけ、身体提示の方法という観点からゲーテの諸作品をあらためて読み直すことの必要性を説いている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の目的は、ゲーテの作品における身体表象をアレゴリーと象徴の概念を軸に分析し、ゲーテの作品の革新性を証明しようとしたものである。ゲーテが受け継いだ文化的・社会的な状況を明らかにするために論者が行なった 16 世紀前半以降のイタリアやフランス等における宮廷祝祭とバレエに関する分析は、論者の研究射程の広さと知識の深さを証明している。祝祭劇やバレエ等、舞踊との関連という観点からなされたゲーテ作品の考察は、ゲーテの作品におけるアレゴリー的構築と時間・空間・身体具体性との関係を明らかにし、ゲーテ研究史に新たな学術的視点を提示するものとなっており、その意義は高く評価される。さらに、民謡の受容と改作に関する考察の中で示された論者の指摘は、ゲーテとヘルダーとの交流の研究に新たな知見を提供している。

審査委員会においては、本論文の学術的な意義への高い評価と同時に、更なる高みに向けてのいくつかの指摘がなされた。まず、論文の中心テーマと論文構成の問題が挙げられた。即ち、第三部ならびに「結論」からは、本論文における論者の最終目標がゲーテの作品における手法の時代性と革新性を論証することにあつたことがうかがえるが、それをより明確にするためにも、論文のタイトルとその構成に関しては更なる検討の余地が残されているといえる。具体的には、第一・二部と第三部のつながりについてカーニバル性を中心にした詳しい説明があれば、全体がより緊密にまとまったであろう。また、第二部で扱われるノヴェールと百科全書の自然観・情念論と第三部で言及されるゲーテの自然観の関係、更にはゲーテにおける自然と身体と情念の捉え方がイストワールやエクリチュールのあり方とどのように関わるのか、そして、ゲーテの作品におけるポリフォニー性とはいかなるものであるのか、これらの点についてさらに詳細な考察が加えられるならば、ゲーテ作品の持つ独自性がいっそう明らかになると考えられる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。